

ウイグル族の親族と婚姻：哈密地区の事例を中心に

西原，明史
安田女子大学文学部：講師

<https://doi.org/10.15017/7360087>

出版情報：国際教育文化研究. 1, pp.61-74, 2001-03-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



ウイグル族の親族と婚姻

－ 哈密地区の事例を中心に －

西原明史

1. はじめに

「私はウイグル族を研究しています」。こう言えば、普通、私の具体的な研究対象はウイグル族の文化や社会で、そのためにウイグル族と会ってもいるだろうと理解される。実際その通りではある。しかし、字義通りに読めば、そういう理解にはなり得ない。「ウイグル族」などどこにもいないのだから。実は「ウイグル族」とは、中国西北部の新疆に現実に生きる人々と同じ次元に並ぶ具体的な何者かではない。それは、彼らを一言のもとに包含しようとする抽象的なカテゴリーにすぎないのだ。従って、冒頭の文章は厳密に言えば、「ウイグル族」というカテゴリーの研究であるとしか言いようがない。これはどういうことだろう。少し説明したい。実は「ウイグル族」とは、修辞学的に言えば、提喻である⁽¹⁾。

提喻とは比喩の一つで、瀬戸の言葉を借りれば「意味関係における包含関係」だ（瀬戸、1986:22）。これは、提喻とそれによって表象されるもの同士が現実の隣接関係にはないということである。バラ、桜、ユリなどと「花」の関係がそれだ。「花」は前3者を代理する提喻であり、それら現存する物とは異なる次元つまり観念上にある。事実、瀬戸は続けて、「類（カテゴリー）そのものは存在しない。類の存在がなおかつ感じられるとすれば、それはわれわれの頭の中の概念操作によるものである」と語る（瀬戸、1986：22-23、かっこ内は筆者）。この通りだとすると、「ウイグル族」も「花」と同様、「頭の中の概念操作」によって構成されたものだということになりはしないだろうか。そして、この操作を行う主体が、決してその「類」によって括られる当の人々だけではないところが、事態を複雑にする。中国政府を始め、多数派である漢民族、あるいは他の少数民族、そして国内外のメディアや研究者なども、それぞれの立場から「ウイグル族」を構成するからだ。こうして、熱心なイスラム教徒、民族独立運動の担い手、あるいは歌と踊りの得意な人々等々、宗教、政治、文化の各方面からいくつかの「ウイグル族」が出現する。「頭の中の概念」である以上、想像は自由だし、それらが全般的外れだなどと言うつもりもない。しかし、その言葉では含みきれない例外が少なくないのも事実だ。

例えば、新疆のイスラム事情はかなりの多様性をはらんでいる。スンニー派、イシャン派（神秘主義）⁽²⁾、タリバンが、世代、階層、地域を跨いで、それぞれ勢力を保っているのだから。また、独立運動と一口に言っても、よく耳にする「東トルキスタン共和国運動」がどこまで人々の心を捉えているのかは全くの未知数だ。新疆の哈密で公務員をしているウイグル族の男性

からこんな話を聞いたことがある。(武装警察隊が訓練している風景を一緒に眺めながら)「もしA郷(反政府運動組織の巢窟と見なされている地区)が地区政府を攻めたとき、彼らが我々を守ってくれる」。もちろん冗談だ。しかし意味深ではある。その言葉から、まず彼ら都市の公務員は「東トルキスタン共和国」の活動家にとって国家側、漢族側にいる敵と見なされるという認識が透けて見える。さらに、彼らが「黄色い狼」と呼ぶ武装警察の存在が、そもそも政府が「民族分裂運動」と定義する動きを非現実的なものに行っているという理性的な認識も垣間見られる。そして、何よりこの運動をネタに冗談を言うということ自体、それを軽く見ていることを証明している。また、歌と踊りが好きな民族というイメージなど、黒人がみんな音楽の才能を持つと考えるのと同じくらい安易であると言っていい。

結局、「ウイグル族」という提喻で彼らを表象するには無理がある。それは数ある現実の一つにすぎないのだから。にもかかわらず、それを根拠に彼ら全体への類推が繰り返されるうちに、いつの間にか特定の「ウイグル族」像が実体化し、実際に新疆にそういう人々が生活しているかのような気にさせられてきた。ライルならこれを「カテゴリー・ミステイク」と言うだろうし、サイードは「オリエンタリズム」と呼んだことだろう。従って、今必要なことは、これまでのように「ウイグル族」によって彼らを理解することではなく、無反省に再生産されてきた「ウイグル族」について再考しようとする事だ。これは参与観察を旨とする文化人類学にとっては当たり前のことだが、ことウイグル族研究においては、そうならないことが多い⁽³⁾。どうしても、エスニック・ナショナリズムという要素を彼らに書き込もうとしてしまう⁽⁴⁾。しかし、彼らは別に四六時中政治的文脈の中に生きているわけではない、と私は思う。「いやそんなことはない。表面上はそうでもいざとなればナショナリズムが頭をもたげるんじゃないの」、と言われたこともある。まさか「いざというとき」を望んでいるのだろうか。そういう研究者の側の勝手な思い入れ、例えばロマンティズムやヒロイズムといったものを、できるだけ取り除いて彼らを記述することが、本稿の主題である。

2. 男は聖で、女は俗か？

女性のヴェール着用や一夫多妻の慣習など、イスラム社会には女性排除や蔑視のイメージがつきまとう。また、最近ではアフガニスタンを支配するイスラム原理主義のタリバン政権が、女性の教育制限を行っているというようなニュースも耳にする。では、同じイスラム教徒であるウイグル族社会ではどうなのだろう。

ウイグル族には、「夫は二番目のアラー」というたとえ話がある。イスラムという言葉が、そもそもアラーへの絶対的な帰依を意味する。イスラム教徒の妻にとって、夫はそれと同等の帰依が捧げられねばならないということになる。長年にわたるウイグル族の歴史学的、社会学的研究の成果を蓄積している『維吾尔族簡史』でも、次のような記述がある⁽⁵⁾。「夫の言葉は無限の権威を持ち、妻はそれに歯向かえないどころか、口答えすることすら許されない。このように妻は完全に夫の付属物であり、独立した人格も認められない」(＜維吾尔族＞編写組、1989:358-359)。また、「妻は一般に家の財産に口出ししたり処理したりする権利はない。女性

が社会的な生産労働に参加する機会は極端に少なく、絶対多数は家事に従事するのみである。例えば食事作りや弁当運び、編み物、家畜の世話などである」、という紹介もある（斉他、1996:75）。ウイグル族における男尊女卑の伝統は、研究書の中では常識と言っていいだろう。

もちろん、上記の記述の後にはいずれも、例えば「解放後は社会経済的基盤の変化に伴い、家族関係にも大きな変化が生じ、女性も男性と平等な権利を獲得し、新しく睦まじい家庭が形成されている」、というような但し書きが入る（斉他、1996:75-76）。要するに、このような女性差別はすでに過去のものになったということも、また一般的に了解されている。確かに、「解放」以来の中国共産党による様々な社会改革は、ウイグル族社会のジェンダーを混乱のうちに変容させてきた。それは間違いないだろう。中国社会全体における女性の社会進出ぶりがウイグル族の女性に影響を与えないはずがない。かつては女の子を産むと「狐が生まれた」と言い、その逆だと「狼（ウイグル族のトーテム）が生まれた」という言葉で喜びを表現したそうだが、今はそんなことを表立って言う人はまずいないだろう。どちらの性別でもそれは「アラーの意志」だといって喜んで受け入れる。そして、その子は男女の区別なく、最大限の愛情と投資の対象として「小皇帝」となる。これも中国で実施されている「計画生育」政策の結果の一つだ。親の教育熱は高く、「学前班」と呼ばれる小学校入学前の塾も大流行である⁽⁶⁾。

ただ、一方でこういうやり言葉があるのも事実だ。「夫の妻に対する態度は、20代のときはボーリングの玉のよう。30代ではバスケットボール、40代になればピンポン玉、50代には野球のボールのようにカーンと打って遠くへ飛ばしてしまう」。もちろん他愛のない笑い話にすぎない。しかし、それが単なる願望であったとしても（つまり現実にはもちろんこのようにできるはずがない）、ここに喩えられたような関係が観念として存在することは示している。もちろん、例えば日本でもこういうことを言う人はいくらでもいそうだが、その場合、背景には男尊女卑の伝統に加えて夫婦間の経済的力関係がある。では、基本的に夫婦とも仕事を持つことが当然とされている現代中国においてこの観念を補強するものは何だろうか。可能性としては、最高の理念とされるイスラム教が、まず第一に挙げられるのではないだろうか。

周知のことだが、女性はモスクに入れない。男性がモスクで礼拝を行っているのと同じ時間に、女性は自宅の一室でそれを行う。また、ウイグル族の間でいまだ存続しているイシャン派（神秘主義派）も、「ズィクル」と呼ばれる儀式を男女別に行う。男性のそれは金曜の昼下がり（2時半からの礼拝終了後）にモスク内で、一方女性のほうは深夜に家で実施される。さらに、イスラムがらみで言えば、葬式や墓参りの際、女性は墓地に入れない。なぜだろう。これについて面白いことを聞いたことがある。墓地に漂っている死者（男性？）の霊魂は透視できるほど目がいいため、女性の裸を見てびっくりしてしまう。だから墓地には入れないというのだ⁽⁷⁾。ここには、男性の目の中で女性はあくまで性的存在である、という価値づけが浮き彫りにされている。意識的無意識的を問わず、性的アピールによって男性を惑わす存在というわけだ。ヴェール着用も、基本的にはそういう発想の基に行われているのではないだろうか。

とすると、イスラム的価値観では、女性は性的存在だから聖なる場所から排除され、家という俗な場所へと隔離される。その結果、イスラム教を信仰し、観念上は礼拝の履行を至上価値とするウイグル族にとって、最も神聖な場所であるモスクや墓地に入れない女性は低く見られ

ることになる。そう理解していいのだろうか。実際ウイグル語においては、女が俗あるいは家と重ねられていることを示す語彙は多い。妻の丁寧な呼称として、ハニムという言い方があるが、これは家や部屋を意味するハナや、家産を意味するハニマンという言葉と関連がありそうだ。また年輩女性への尊称としてハンやハニチャという言葉がくつつくが、これは世俗君主を意味するハンに由来するのではないだろうか。というのも、年輩男性の尊称が聖職者を意味するアホンなのだから。ここには、確かに男は聖、女は俗という図式が成り立っている。

ところが、そう簡単に割り切れるわけではない。上述したハニムだが、まさに聖なる場所であるハニカ（モスク、聖人の墓、学校などがその中にまとめられた神秘主義派の活動の中心）とも、その発音が似ているのである。また、死者が出たとき、女性だけでプッチャック・オクシ（豆を読む）と呼ばれる儀式を行う。さらに、新疆南部のカシュガルでは女性も男性も一緒にズィクルを行っている⁽⁸⁾。これらの事実から判断すれば、女性もまた聖なる領域に踏み込んでいることがわかる。従って、男は聖で女は俗と単純に言い切ることとはできない。となれば、女性は聖なる場所から排除されているため、社会的権威も剥奪されているという論法は成立しにくくなる。それどころか、逆に言えば、そこから排除されていないのだから、社会的に弱い立場にあるとも限らないという仮説さえ引き出せることになる。

現に、財産の分与について言えば、女性は相当の嫁入り道具を準備してもらうにも関わらず、両親の財産継承権を保持している。また、ウイグル族は娘の離婚後の生活に大変心を砕いており、遺産分配の際、娘にはできるだけ家を与える。たとえ残された財産が一つの家だけだったとしても、それを優先的に娘に与え、万が一離婚して実家に戻ってきても困らないように備えるのだ（斉他、1996:78）。こう見れば、別に女性を露骨に軽視しているようには思えない。

ここまでの流れを振り返ると次のようになる。もともとウイグル族社会では男尊女卑の風があったが、「解放」後は社会制度的に改善された。しかし、イスラム教の影響で男性を上に見る習慣が観念上は残るように見える。しかし仔細に見れば、宗教活動上も社会慣習上も必ずしもそうではない場合がある。以上、まるで振り子のように女性排除かそうでないかを繰り返すことになってしまったが、本当のところ女性の地位はどうなっているのだろう。

3. ウイグル族の社会構造

シェリ・オートナーは、女性の普遍的劣位性の基礎をなす論理を析出しようとする論考の中で、考察のレベルを分類しておくことの重要性を指摘している。女性の地位といっても、どのレベルに焦点を当てるかによって見えてくるものが全く違って来るからだ。彼女によれば、それは三つに分けられる。まず第一に普遍的事実のレベル、次にイデオロギー、象徴化、社会構造といった文化的レベル、最後に女性の活動や影響力など観察可能な具体的レベルである（オートナー、1990[1974]:87）。前節で問題にしたのは、主に2番目のレベルにあるイスラム・イデオロギーに関わる事柄であった。そこでは、聖と俗がそれぞれ男と女を象徴する場合もあれば、その逆もある。では一体どちらなのだろうということが、現在のテーマになっている。

ただ、イスラムに関する考察だけでは、ウイグル族における性差のありようを検討するのに

十分とは言えない。というのも、中央アジアのトルコ系諸民族の歴史をひもとけば、イスラムへの改宗以前に数多くの宗教を信仰した経験がある上、その間各地域の政治的実情などに応じて独自の社会を築いてきており、イスラムだけが彼らの文化を規定するわけではないからだ。現在ウイグル族として括られる人々だけを見ても、南はカシュガル（10 世紀後半）から東はトルファンや哈密（16 世紀前半）まで、ほぼ6 世紀にわたる改宗のタイムラグがある。当然、各地にイスラムとは関係ない既存の文化があった。実際、例えば「イスラムの衣を脱げばシャーマニズムの身体が現れる」という言葉が、バクシ（シャーマン）に思い入れの深い研究者によって語られたりする。もちろんシャーマニズムについてもイスラムと相互浸透しており、真正な土着文化と外来文化という具合にきれいに分けられるわけではない⁽⁹⁾。しかし、片手落ちにならないためにはイスラム以外の側面にも目を向ける必要があるのは当然であろう。

そういえば、先ほどのオートナーによる分類では、同じ2 番目のレベルにイデオロギーの他に社会構造が挙げられていた。これはイスラムと無関係のはずはないとしても、その流入以前から根を下ろしていたものでもある。例えば、イスラムを信仰するベドウィンに見られる性の否定の起源を、イスラムではなく部族の社会構造に認めるという意見がある（アブ＝ルゴド、1989[1986]:117）。また、そもそもコーランの女性観も、それを実際に編纂した後世のカリフらの男性中心主義の産物だとする見解もある（大越、1997:132）。これらを踏まえれば、性差がイスラム以外の領域に由来するかもしれないと想像することは決して唐突ではないだろう。例えば社会構造の中では、女性はどうのように配置されているのだろうか。以下ではウイグル族の社会構造に関わるいくつかの事例、財産相続、親族呼称、そして親族のアイデンティティ意識を取り上げ、性差に関する考察の遡上に乗せることにしたい。

すでに前節の最後に財産分与のほんの一端を紹介したが、まずは、ここでもう一度この項目での性差を見る。前節にも引用した『維吾尔族簡史』には、遺産分配の原則が男尊女卑であると明記している。女性は男性の2 分の1 しかもらえない⁽¹⁰⁾。このことからわかるように、ウイグル族は明確に父系出自の原理を持つ。この原理の中で親族名称（呼称）がどのように決められているのかを紹介しよう。（次ページの図1 を参照）

この系譜で目につくのは、父方母方の親族呼称が同じだということだ。これは夫方と妻方の親族呼称にも当てはまる。例えば同じ中国の漢族の親族呼称では、そういうことはない。父方の祖父母は爷爷・奶奶だが、母方はそれぞれ老爷・姥姥となる。父方オジ・オバは叔父（伯父）・姑母、母方オジ・オバは舅舅・姨妈となる。イトコについては、父方交差イトコと母方イトコ（姓が異なるイトコ）の場合、キョウダイそれぞれの呼称の前に「表」がくっつく。父方平行イトコでは、前に「堂」がつく。このように、その違いは明白だ。ところがウイグル族はこれらの区別が全くない。父方であれ母方であれ、祖父と祖母はボワムとモママとなり、それ以上の世代は全てウログボワム（偉大なおじいさん）か、ウログモママ（偉大なおばあさん）である。そして父方母方関係なく、オジはダダ、オバはアチャとなり、ただ年齢が父や母より上か下かによって、チョン（大）か、キチック（小）がつくだけだ。イトコについても、ただナウラがつくのみである。また漢族の場合、エゴにとって自分の父母と妻の父母の呼称は同じではないが、ウイグル族においてはこれも区別しない。

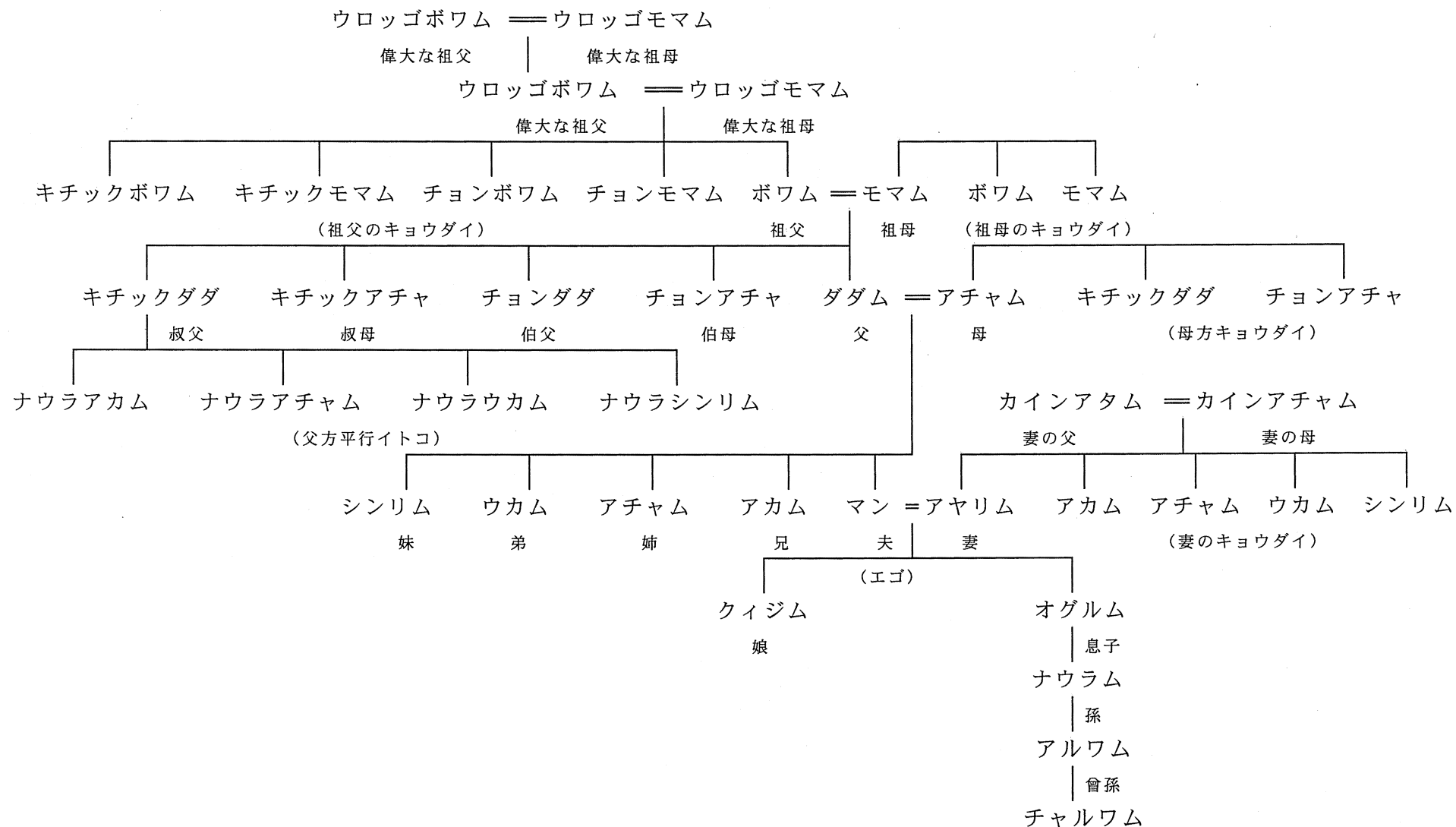


図1 ウイグル族の親族構造

要するに、親族呼称の少なさが目につくのである。これは何を意味するのだろうか。まず考えられることは、ウイグル族においては親族関係があまり重要視されていないということだろう。親戚づきあいが少ないければ、呼称など生まれるはずはない。自らも回族出身のイスラム教徒であり、長年ウイグル族の民族学的調査を実施してきた中央民族大学民族研究院の楊聖敏も、彼らの「親族範囲が狭く、親族関係も薄く、家族制度が十分には発達していない」ということを認めている（楊、2001）。そして、その原因を以下のように分析している。「親族関係を維持するための主要な経済的基礎は、財産の継承権である。農民にとって最も重要な財産は土地だ。歴史的に見て、多くのウイグル族の農民は土地を持たなかった。はては土地以外の財産すら何も持たない者もいた。自然に親族間で互いに助け合う経済能力に乏しいことになる」（楊、2001）。お互いに持たざる者である親戚、姻戚同士が協力し合うはずもなく、互いに疎遠になり、その結果親族呼称が未発達のままだという見解だ。

呼称の内容に目を向けなければ、非常に説得力のある意見であろう。しかしどうもひっかかるのは、父方母方に関係なくオジ・オバを父や母と同じ呼称で呼ぶことだ。それぞれの配偶者までそう呼ぶ。このことは直接のインタビューに加え、ウイグル族の民俗誌などでも確認できる（齊他、1996:76）。この直系親族呼称の傍系や姻族への転用は、むしろ親族関係の親密さを意味するとも受け取れるのである。家族同然の呼称を用いるのだから。そもそも呼称がない、というのなら、親族関係の希薄さをその背景に読みとっていい。しかし、ただ種類が限定されているにすぎない。因みに、同じ新疆の漢族の間で、母方祖父母を爷爷・奶奶と呼ぶ習慣がある。新疆以外からの移民が多い当地では、移住男性と新疆出身の女性が結婚することも多いが、その場合孫にとって身近なのは母方の親族だ。その結果、父系原理の漢族で本来親密であるべき父方祖父母の呼称が、母方祖父母に流用されるのである。これは、ウイグル族に見られる呼称の転用が親しさの反映であると考えていいことの傍証ではないだろうか。

こうして、親族呼称の少なさは、むしろ直系、傍系、そして姻族を含む親族関係の密接さを意味するのではないかという仮説を立てることを可能にしてくれた。このことは次に見られるウイグル族の伝統的慣習によって強化され得る。それは、ラカムと呼ばれるファミリーネームの存在である。ウイグル族の名前は二つの要素からなる。前が自分の名で、その後ろに父親の名がくっつく。これが姓に相当する。イスラムの浸透以降普及したアラビア方式の名付け方だ。しかし、これでは姓が代を追うごとに変わり、直系の父を除き、父方の祖父母やオジやオバとの血縁関係すら、教えられなければ気づかないということになってしまう。もし先の楊の主張通りなら、ウイグル族はこのことに何の痛痒も感じないはずだ。しかし、やはりそうではなかった。彼らはラカムと呼ばれる一種のリネッジ名によって、姓に代えていたのだ。

ラカムは新疆南部や東部で一般的な習慣である。私が調査している哈密地区でも誰もが持っている。先祖の官職、職業、顔立ちや体つき、動作、性格、本籍地、そして何らかの出来事に由来するケースもある。最後の名付け方については、いくつかの物語も聞いた。例えば、「カイナック・スー（熱い水）」というラカムの由来について、次のようなエピソードがある。清朝時代末期、新疆北部のイリで農民の暴動が起こった。それを抑えるため哈密王が軍隊を急派する。この中に一人の騎馬武者がいた。彼はのどが渴いたので部下に水を持ってこさせたところ

ろ、熱い水を入れたひょうたんを持ってきた。この武者がそれを飲んだところ、あまりに熱くて舌が焼けこげじっとしてられない。馬にかけると馬も熱さのあまり走り出し、その勢いで敵の軍勢を散々にかき回し、うち負かすことに成功した。この功績のため哈密王は彼に褒美として現在の花園郷（哈密地区郊外の村）を与えた。それ以来、彼の子孫は「熱い水」という姓を持つようになったという。

ここに出てくる哈密王とは清朝に承認された封建領主のことだが、このラカムの普及にことのほか熱心だったという。戸籍にも記載し、正規のファミリーネームとしていた。従って、これがない人は戸籍不備ということになる。そういう人は、王宮の中に3週間ほど閉じこめられ、係りの役人に監視されながら生活する。その中で何らかの特徴などを見つけてもらい、それを基にラカムを決めてもらうというようなこともあったという。哈密王のこうした努力もあり、哈密は他の地域に比べてラカムの普及率が図抜けて高いそうだ。なおラカムについては、哈密地区教育委員会古籍研究所のサマツ・アスラが詳細な収集と分析を実施中とのことで、その成果が待ち遠しいところである。本稿では、その膨大であることが予想されるラカムのほんの一部を紹介するにとどめたい。

職業から		容貌、体格、動作から	
シャハン	すずつきの馬車を走らせる人	ダズイ	口の大きな人
カラムシャッハ	有名な書道家	ヨグンブル	鼻の大きな人
マジンユラル	通訳官	ダトウ	頭の大きな人
アホンラル	イスラム聖職者	バスタムラル	身体の頑丈な人
キュチュケラル	哈密瓜を作る人	カシヤンラル	ゆっくり歩く人
性格、特徴、特技から		エピソードから	
コイラル	羊のような性格	トコムラル	哈密王の妃を、突然降り始めた雹から毛布で守ってあげた
ブリウルラル	鳥のように美しい声	クシカチ	戦争で食べ物がないので、なつめの木に登ってその実を食べる子ども達
アラシャッハ	大口をたたく人		
チュルキラル	虎のように賢い		
コラッカラル	早耳の人		

表1 ラカム一覧表

こうして、ウイグル族には、ラカムを通じて親族としてのアイデンティティを保持しようとしていることがわかった。さらに、特に哈密地区のウイグル族には、どうやら族譜が存在していた形跡がある。これも上記のサマツが掘り起こした伝統的慣習である。ウイグル語でジョルンカイと呼ばれる族譜は一種の系図であり、それに父系祖先個々の名前や生年月日、経歴・功績、さらには顔つきや体つきなどまで書き込まれているという。現在知られているだけでも5種類の書き方がある。天秤棒型、樹木型、太陽型、鎖型、そして通常の系譜型だ。

残念ながら、この族譜は文化大革命のため完全に喪失しており、原本そのものはもはや残っていない。今のところ復活する兆しもないという。それはともかく、彼らがこれだけ族譜の作

成に力を入れていたということは、それだけ自分が属する一族に対する誇りと感謝の念を持っていた証拠と言っていいたいだろう。親族の一員としてのアイデンティティ意識がここからも窺える。以上のように、ラカムや族譜などの事例から見ても、ウイグル族の親族関係が希薄であるという印象は、的を得たものではない。むしろ、その絆はかなり強いと推測できよう。

実は、先に引用した楊聖敏は、もちろんこのことも見抜いている。ただし彼はそれを一部の富裕階層に限定していた。彼は、貴族や地主などが「現在に至るまで強烈な世襲の血統概念を保持している。彼らは自己の親族の中で伝えられてきた口承の歴史に依拠し、祖先を5代から10代前まで溯ることもできる。しかも、各世代の直系、傍系に誰がいたか、そして何をしたかについて詳しく知っている」と述べている（楊、2001）。これは、サマツが発見した族譜の存在を裏付けるものでもある。彼によれば、族譜はほぼ10世代から15、6世代前ぐらいから始まったというのだから。しかし、一部の階級に限定するのはどうであろう。楊が提出する事例によれば、例えば南新疆のある農村では全人口のわずか7.1%が地主であったという。とすれば、この少数の地主のみが親族関係を重視していたことになる。しかし、哈密地区に目を移せば、ラカムとは、もし持っていなければ王宮に監禁されるくらい誰もが持つ身分証明代わりのものであったし、族譜についても、前記サマツは古老からの聞き取りの結果、30%から50%の普及率だったのではないかと考えている。とすれば、親族間の結束という現象は、とても地主階級に限定されるべきものではないであろう。

以上、哈密地区を中心にウイグル族の親族構造を概観してきた。では、なぜこのように緊密な親族関係が必要なのだろう。この問に対し、楊が明快に答えてくれる。「人類の血縁に基づく系譜制度の形成は、集団内部で財産と権利を保持し継承していく必要から生じたものである」（楊、2001）。確かに、ウイグル族の主流である農民なら、現在の自分があるのは過去の祖先から受け継いだ財産（土地、家屋、農機具など）のおかげであると考えるのは自然だ。曾祖父以上が全て「偉大なおじいさん」として一括りにされるのも、例外なく敬意を示すためであろう。そして、次世代の幸福のためには、それを保証してくれる財産を守らねばならない。そのためにも、財産の散逸を招く親族の分裂を避けることが肝要だ、ということになる。随分迂回してきたが、この仮説を踏まえて、次節ではあらためて女性の社会的位置を見直してみる。

4. 理想の結婚

最も恐れられることが財産の散逸であることは、ウイグル族の農村でよく見かける分家の仕方に反映している。彼らの慣習では、結婚した者から独立していき、最後に残った末っ子が両親の家屋を引き継ぐことになるのだが、独立といっても決して「本家」から離れたところに家を構えるわけではない。同じ敷地内や隣接した用地にいわば継ぎ足していくことが多い。つまり、物理的距離をおかないのである。これは、直系家族の心理的な分裂を防ぐためと考えられないだろうか。離れたところに住めば、どうしても関係が疎遠になるからだ。それにしても、それほど財産の散逸を恐れるのなら、そもそも分家をしなければいいのではないだろうか。それがなければそもそも分家など必要ないのが、結婚である。

結婚が分家つまり親族の分裂を、ひいては財産散逸を招くということは、可能性としてはありそうである。アブ＝ルゴドも、「性は個人と個人を結びつける絆であるために、社会関係を秩序づけるシステムへの抽象的な脅威であるばかりでなく、父方の血族の結束にたいする現実的な脅威である」と述べている（アブ＝ルゴド、1989[1986]:117）。夫が妻によって親族関係から引きずり出されるということは、確かにあるだろう。結婚つまり「性による個人的絆」は、親族の結束を旨とする集団には適さないと言える。実際、ウイグル族の文化をながめてみれば、思い当たるふしはいくらでもある。

まず、彼らの婚姻プロセスが挙げられよう。結婚式はその規模といい、かける費用といいウイグル族にとって最も大きな人生儀礼である。そんな婚姻を最終決定する婚約の儀式と結納の相談のいずれにも、新郎の父親は参加しない。前者は母親が、後者は代理が請け負うのである。これは、結婚を敵視する気持ちの表れと言えないだろうか。というのも、同じイスラムで、結婚は「血族集団の結束を脅かし、長老の権威と支配を脅かす」と考えられているベドウィンでも、父親や父方オジは「ことさらに若者の婚礼を無視する」というのだから（アブ＝ルゴド、1989[1986]:118）。また、結婚式のことをウイグル語でトイというが、割礼の儀式の儀式のことをスナ・トイ、揺りかごの儀式（出生から40日後、「第二の母親」となる揺りかごに入れる儀式）のことをビシュク・トイということからわかるように、元々「トイ」には単なる儀式という意味しか込められていない。無色な言葉をあてがうことにより、結婚という事実自体消し去ろうというのだろうか。ここにも、婚姻への反発の気持ちが透けて見える。

また、結婚した夫が死んだときの財産相続はどうなるのだろうか。前節で女性は男性の2分の1ということすでに述べているが、全てこの大原則に従う。すると次のようになる。妻が先に死んだとき、子どもがいれば、夫は妻の財産の4分の1を得る。残りは子どもである。子どもがいらない場合、夫はその2分の1を得る。残りは妻の直系親族が得る。一方、夫が先に死んだとき、子どもがいれば、妻が得るのは夫の財産の何と8分の1で、残りは子どもへ、そして子どもがいなくても4分の1にすぎない。残りは夫の親族が継承する。すでに結婚した息子が先に死去したケースでも、その財産の6分の1は父つまり夫へ、のこりはその息子の子どもたちへと譲られる。要するに、財産相続では、妻は圧倒的に冷遇されていると言えよう（11）。

そして、離婚についても、妻の立場はかなり弱かったようだ。「ダラック（別れよう）」という一言を一度言えば、それで離婚できる。法律上の手続きはいらない。これはイスラムの習慣で、妻を容易に離縁できることになっている。統計的な資料が手元にないのだが、私の実感では離婚している人が目立つ。ウイグル族自身も自分たちは離婚が多いという。南新疆では、80%に達するという噂も聞いた。これは、もはや妻の立場が弱いというより、機会さえあれば「性による絆」を断ち切ろうということではないだろうか。実際、妻が先に死んだとき、子どもの養育のため夫は妻の姉妹と再婚できるが、夫が死んだ場合は、同様に妻が夫の兄弟と再婚というわけにはいかない。つまり夫の親族の枠内に残ることはできないのである。

以上のように、結婚が敬遠され、離婚は容易、死別の際はわずかな財産しかもらえず家を出ていかなければならない。これらの事例を並べてみると、親族間の絆の強さが「性による絆」のそれを上回っていることが、あらためて見て取れる。言い換えれば、夫方居住のため夫の親

族に嫁いでくる女性が、脆弱な立場に置かれているという事実である。財産を維持管理するためにまとまっている父系親族構造にとって、嫁とはいわば外部から侵入し、結束を攪乱する異人と見なされるため、排除されがちなのかもしれない。これが親族構造の中で女性が置かれた位置である。そういえば、あくまで私の経験の範囲内での感想だが、近隣なのにもかかわらず妻が夫の実家に頻繁に出向くという光景に出会った記憶がない。夫は実家にしばしば帰るし、妻の実家にも顔を出す。もちろんこれは都市部に住むサラリーマン家庭での話である。単に嫁姑の関係を嫌がっているためだけだと考えていたが、夫の父系親族と異人である嫁の間の敷居の高さがそうさせていることも、確かに考えられる。

ただ、この結論は不可解な矛盾を招く。嫁の親族構造上の脆弱な位置は、3節で述べた父方母方、及び夫方妻方の親族呼称が同じという事実に反するのである。差がないということは、どちらも大切だという心情の反映であろう。とすれば、外部から来た母や妻が、異人の立場に置かれているはずはない。この矛盾をどう解釈すればいいのだろうか。実は、ある婚姻方法をとったとき、この矛盾が生じない。親族間の絆と性による絆を両立させることができる結婚とは、要するに父系親族内婚姻である。特に父方平行イトコ婚が望ましい。これなら嫁は親族関係をかき乱す部外者どころか、父系親族間の結束を強化しさえするだろう。もちろん、財産が嫁を通じて外の親族に流出することもない。まさに理想の結婚である。彼らの親族呼称は、この観念上の理想が実現したときのものだ。現実はどうなのだろう。哈密地区郊外のH郷では、エガヒチー（木の匠）というラカムを持つ者が、何と人口の65%を占めるそうだ。内婚を繰り返した結果だという。そのうちの一人、Sさんの母は、やはり父の父方平行イトコであった⁽¹²⁾。

5. おわりに

親族構造の考察から見て、どうやらウイグル族においては、女性蔑視というより嫁の排除と限定した方がよい。嫁に比べれば娘は大事にされていた。このことはすでに2節で述べている。娘は結婚の際、莫大な婚資をもたらしてくれるし、内婚を通じて親族関係の強化もはかれるのだから当然である。ただし自由はない。父方平行イトコ婚を達成するためには、必然的に親が相手を決めることになる。現在でもウイグル族はかなり早婚だが、これは自由な結婚を妨げるための処置だったととれる。これを都合よく支えるのがイスラムだ。アラーによる故人の評価は子どもの親孝行の程度で決まるのだが、その最も大事な項目とは、子どもが親の望む結婚をしたかどうかだという。もしそうしてないと、監督不行届として罰されることになる。これは、ウイグル族における孝の概念を説明するために、ある人が平易に語ってくれたことである。

ともかく、自由度ではなく、排除や敬遠という基準で考えれば、同じ女性でも嫁と娘へ対応は相反する。この社会構造上の矛盾が、そのままイスラムという霊的世界の領域に影響し、先述したように女性の位置が聖と俗の間を揺れることになる、というのは言い過ぎだろうか。この小論では、これまで得た資料からウイグル族の性差についての理論的仮説をうち立てることに専念した。その意味で出発点にすぎない。ここでの仮説を基に、ウイグル族の観念上の生活世界を復元していく作業を継続することになるだろう。

註

- (1) この部分は、「民族」の使用法からその概念を検討した拙稿（西原、2001）を参照。
- (2) 新疆のイシャン派については、拙稿（西原、2000）を参照。
- (3) エスニシティ研究の政治性については、拙稿（西原、1996）で検討している。要するに、研究者がえてして二項対立的な描写に陥ってしまうということだ。各項はこの対立関係の中で決定されてしまう。一方の中国が人権抑圧というイメージで描かれれば、もう一方のウイグル族も必然的にそれに対応するイメージを押しつけられることになる。こうして、二項対立の枠内にきれいに収めるためには、当然かなりの例外を削ぎ落とす必要があったはずだ。
- (4) ここで言うエスニック・ナショナリズムとは、共通の文化や歴史といった観点から民族として表現される集団の「帰属性と幸福や自立に対する熱狂の感情」である（星野、1998:9）。
- (5) 同書のあとがきによれば、この本は 1983 年の初版出版以来、3 度の改訂を重ね、その都度ウイグル族を含む専門家による検討会が実施されたという。それもあり、ウイグル族に関する研究書、報告書が必ず参照する、権威あるインターテキストの地位を獲得している。
- (6) 学前班は 6～7 才の児童が参加し、漢語その他の予備教育を受ける。哈密市では何と 90 % の子どもがこれに通っていると、哈密地区教育委員会の関係者から聞いた。
- (7) 一見唐突だが、ウイグル族にとっては必ずしも荒唐無稽ではない。彼らの霊的世界観では、「見ること」は重要だ。例えばウイグル族のシャーマンはバクシと呼ばれるが、その語源は、「見る」の意味を持つ「バック」と、人を表す「チー」の合成語である。遠くのことや未来のこと、つまり隠されたことを見通せるのがバクシというわけだ。このことを如実に示すバクシの呪術が、ガイプキヤルと呼ばれるものである。「ガイプ」は目に見えないもの、形の無いものという意味を持ち、「キヤル」には引っ張るという意味がある。従って訳すとすれば、形の见えないもの（例えば魂）を引き戻す、つまり「招魂術」ということになるうか。バクシは、何らかの理由で魂が身体を離れることによって病気になると考える。そこで、まさに目に見えない魂を見つけ、患者の身体に呼び戻してやることによって、その人の病気を治すのである。
- (8) これは、新疆大学アル泰研究所のメヒライ・ママトト氏所蔵のビデオで確認されている。それは彼自身が 1993 年にカシュガルで収録したという。ハニカの外で、土の中に旨まで男性を埋め、その周囲で女性がズィクルを行っていた。その意味はわからない。
- (9) 坂本によれば、中央アジアのトルコ系の人々にイスラムが受け入れられた一つの原因として、彼らが元々信仰していたシャーマニズムの霊的世界観と、イスラムの一派神秘主義の神人合一観に類似性、親和性があったからではないかと推測している（坂本、1996:70-75）。その後、この両者はお互いに闘争と交流を通じて相互に構成し合ったとも言われている。
- (10) この原則はあくまで机上のものにすぎない。現在では子供の間で性別に関わりなく平等に分配されるという。ただ、以下の三つの場合のみ優先的に特定の子どもに分与される。①一番親の面倒を見た子ども、②貧しい子ども、③身体障害のある子ども。この優遇措置は故人

のキョウダイ間でよく話し合って決められる。

- (11)「解放」前はいざ知らず、そもそも今の社会主義国家中国に、継承されるべき私有財産などあるのかという疑問が残る。中国では、1988年の土地管理法及び憲法の改正を通じて、土地の所有権と使用権が明確に分けられ、使用権の売買も期限付きで認められている（横山、2001）。しかし、それ以前も新疆では、土地は国有としても家屋は私有であった。通称「房契」と呼ばれる家の売買契約も存在していた。家は個人のものとして、国家や個人に売り買いされていたのである。死後、故人の家が売られ、その代金が遺族に分配されるという形で遺産が相続されるケースも耳にした。
- (12)現在は、中国の法律上イトコ婚は許されない。しかし、「解放」以前はあらゆるパターンのイトコ婚が可能であったという。オジとメイもいい。唯一の規則は年齢で、必ず男が上でなければならなかった。

引用文献

- アブ＝ルゴド、ライラ、1989[1986]、「ヴェールにおおわれた感情」、竹村和子訳、『現代思想』Vol. 17-14、112-133頁。
- ＜維吾尔族簡史＞編写組、1989、『維吾尔族簡史』、新疆人民出版社。
- 大越愛子、1997、『女性と宗教』、岩波書店。
- オートナー、シェリ、1987[1974]、「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か」、山崎カヲル監訳『男が自然で女は文化か？』、晶文社、83-117頁。
- 坂本勉、1996、『トルコ民族主義』、講談社。
- 瀬戸賢一、1986、『レトリックの宇宙』、海鳴社。
- 斉清順、巴哈尔古麗、1996、『維吾尔族』、新疆美術摄影出版社。
- 西原明史、1996、「エスニシティ研究の政治性に関する考察」、『教育文化の比較研究』、九州大学比較教育文化研究施設編、九州大学出版会、136-149頁。
- 西原明史、2000、「哈密地区ウイグル族のイスラム信仰」、『中国ナショナリズムと少数民族文化の変容過程に関する文化人類学的研究』、丸山孝一編、平成9～11年度文部省科学研究費研究成果報告書、76-95頁。
- 西原明史、2001、「民族の修辞学」、『安田女子大学紀要』第29号、3月刊行予定。
- 星野智、1998、「世界システムとナショナリズム」、『ナショナリズムを読む』、情況出版、6-19頁。
- 揚聖敏、2001、「吐魯番的維吾尔人 — 一个生态人类学角度的观察」、現在翻訳中。
- 横山廣子、2001、「地域を読む」、朝日新聞朝刊掲載記事（1月24日）。

Kinship and Marriage in Uygur:
A Case Study in Hami Area

Akifumi Nishihara

The purpose of this paper is to explain the gender of Uygur, especially women's position in their social structure. Uygur don't have many kinship name. But paternal side and maternal side is same. Judging from this, they attach importance to unity of kinship relation. This hypothesis is proved by their family name (lakam) and Family tree. Trough them, Uygur people had maintained their lineage identity. But, as marriage is perspnal relation of husband and wife, so it should disturb unity of kinship. In this way, daughter in law is disliked as stranger by her husband's relatives. Therefore, I must revise the predominance of man over woman in Uygur. Probably daughter in law is often removed in relatives of husband. Daughter is not so much removed as bride. She is treated warmly in the inheritance. This is the position of woman in Uygur.

But there is a question that is not yet solved. If, as I said above, kinship name of paternal side and maternal side is same, daughter in law must be treated warmly. The only way that can solve this contradiction is the marriage in paternal kinship relation. Especially the marriage with parallel cousin in father's side is the most desirable.